

詩篇146篇

《生涯をかけての賛美》

- 1 ハレルヤ。私のたましいよ。主をほめたたえよ。
- 2 私は生きているかぎり、主をほめたたえよう。いのちのあるかぎり、私の神に、ほめ歌を歌おう。

《人を恃みとせず》

- 3 君主たちにたよってはならない。救いのない人間の子に。
- 4 霊が出て行くと、人はおのれの土に帰り、その日のうちに彼のもろもろの計画は滅びうせる。

《真に頼るべき方》

- 5 幸いなことよ。ヤコブの神を助けとし、その神、主に望みを置く者は。
- 6 主は天と地と海とその中のいっさいを造った方。とこしえまでも真実を守り、
- 7 しいたげられる者のためにさばきを行い、飢えた者にパンを与える方。主は捕らわれ人を解放される。
- 8 主は盲人の目をあけ、主はかがんでいる者を起こされる。主は正しい者を愛し、
- 9 主は在留異国人を守り、みなしごとやもめをささえられる。しかし主は悪者の道を曲げられる。

《永遠の賛美》

- 10 主は、とこしえまでも続べ治められる。シオンよ。あなたの神は代々にいます。ハレルヤ。

146～150篇は「ハレル詩篇」と呼ばれる詩群で、詩篇の最終幕となります。五つとも「ハレルヤ」で始まり「ハレルヤ」で終わる形式が採られています。「הללוֹיָהּ／ハレルー・ヤー」とは、「ヤー」が「神の御名を短縮化したことば」であり、「ハレルー」が「誉め讃えよ」を意味しますから、「主を誉め讃えよ」と訳されます。1節を原文で読むと、「נְפִשִּׁי אֶת־יְהוָה／ハレルー・ヤー・ハレルー・ナフェシー・エト・イエホヴァー」となっており、語順どおりに訳すと「ハレルヤ、誉め讃えよ、我が魂よ、主を」となります。更に、2節でも「主をほめたたえよう」「ほめ歌を歌おう」と繰り返され、冒頭から「誉め讃えよ！ 誉め讃えよ！」と連呼していることが分かるでしょう。しかも、詩人は「生きているかぎり」「いのちのあるかぎり」と、地上にあって最期の息を引き取るまで賛美を続けると主に誓っているのです。そうです、私たちの人生も「ハレルヤ」で締めくくることができれば、この生涯全体が祝福に包まれて主の許へ行くことができるでしょう。その最期の瞬間のために、日頃から「ハレルヤ」と唱え、叫び続けたいと思います。

詩人は、人とは当てにならない存在であることを知っていました。「君主」（3節）とは「気高い人」「高貴な者」を意味しますが、どんなに地位の高い人も一枚剥がせば一介の罪人に過ぎません。欠けがあり失敗を犯す人間です。「救いのない人の子」（3節）、「霊が出て行くと、人はおのれの土に帰り、その日のうちに彼のもろもろの計画は滅びうせる」（4節）という表現は、人の命には限りがあること、その儚い現実を突きつけます。人生とは一時の輝きであり、人は人に永遠に頼ることはできないのです。

対して、真に頼るべき方は「**ヤコブの神**」「**その神、主**」（5節）です。ここで「イスラエル」ではなく「ヤコブ」と言われているのは、かつて狡猾にして兄エサウを欺いた人が「新しい人」として造り変えられたこと、神にはそのようなことがおできになることを思い起こさせるためでしょうか。6～9節では、神がどのような方であるかが様々な視座から描かれています。

- ・ 天と地と海とその中のいっさいを造った方
- ・ とこしえまでも真実を守る方
- ・ しいたげられる者のためにさばきを行い、飢えた者にパンを与える方
- ・ 捕らわれ人を解放される方
- ・ 盲人の目をあけ、主はかがんでいる者を起こされ方
- ・ 正しい者を愛する方
- ・ 在留異国人を守り、みなしごとやもめをささえられる方
- ・ 悪者の道を曲げる方

これらを総合して見るとき、一人の人物が思い浮かびませんか。主イエスが地上で行なわれた一つひとつの御業がこれらに当てはまってくるのです。主イエスはまさに「受肉した神」であり、この人を見れば神がどういう方なのかが分かります。

イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、私が分かっていないのか。私を見た者は、父を見たのだ。なぜ、『私たちに御父をお示してください』と言うのか。』（ヨハネ14:9）

主イエスを神として信じ、この方に賛美をささげる人生が与えられた幸いを覚えます。

最後に、10節では冒頭の「生涯をかけての賛美」が更に敷衍され、「永遠の賛美」に拡大しています。「とこしえまでも」「代々にいます」（10節）と、神の永遠性に目が向けられています。詩人は地上の生涯を終えたとき、そこから始まる永遠の賛美をイメージしていたのでしょう。私たちも、日々「ハレルヤ」と歌いつつ人生を歩み抜き、その賛美が永遠の礼拝につながっていることを心に刻みながら神の許に行きたいと思います。